



小学生・中学生の皆さんへ

2023年[令和5年]

発行：荒川区
発行部数：23,000部
〒116-8501
荒川区荒川2-2-3
☎(3802)3111

あらかわ区報 Jr

3.14
No.153

あらかわ区報Jr.は
荒川区ホームページで
ご覧になれます

<https://www.city.arakawa.tokyo.jp/a004/kouhou/kuhoujr/arakawakuhojr.html>

ARAKAWA KUHO JUNIOR

ジュニア



ジュニア
記者が



木版画摺師

木版画彫師



木版画の若手職人

阿部紗弓さん
小川信人さんに

弟子入り



みんなは、学校の授業で木版画を習ったかな？今回は、浮世絵などの木版画作品を手がけている関岡木版画工房に、第一日暮里小学校のジュニア記者が訪問。木版画彫師の阿部さんと木版画摺師の小川さんに弟子入りして、江戸時代から伝わってきた木版画の制作を学びました。学校の授業で習う木版画とはちょっと違うかも。ジュニア記者と一緒に伝統工芸に触れてみましょう。



新型コロナウイルス感染症予防のため、取材時は全員がマスクを着用していますが、撮影のためにマスクを外している場合があります。

問い合わせ 荒川ふるさと文化館 ☎(3807)9234

次は5月に発行する予定です



木版画のこと、いろいろ 教えてください!



絵師、彫師、摺師による分業で作られる木版画。今回は、木版画彫師(彫師)の阿部さんと木版画摺師(摺師)の小川さんの作業を見学させていただきました。また、小川さんの指導のもと、木版画摺りの体験をしました。果たして上手に摺れたのでしょうか?



▲彫師が使う道具には、いろいろな種類の彫刻刀や木槌があります



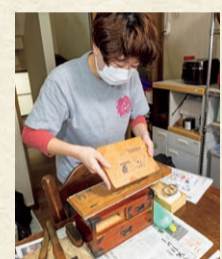
▲彫師が彫った板は、版木と呼ばれます。この版木は阿部さんの親方の関岡さんが作ってくれた、彫り手順の見本です



▲小川さんのパレンは親方の川嶋さんから受け継いだもの。パレン専門の職人さんは日本でも一人しか残っていないそうです

阿部さんのお仕事を見てみよう!

絵師が墨で描いた下絵を使って版木を彫るのが彫師の仕事です。最初にでんぶのりを版木に乗せ、手で伸ばしてから下絵を版木に貼ります。次に、墨線が見えやすくなるように、のりが乾ききる前に紙を少し湿らせながらこすり、下絵の紙を薄い皮一枚の状態にします。さらに油を薄く塗り、より見えやすくしてから彫り始めます。多くの木版画は多色摺りで、色ごとに版木を作ります。



▲伝統工芸の木版画には、粘りがあり堅いヤマザクラの木を使います。見本で見てもらった作品には7色が使われていて、彫り終わるまで約1週間かかるそうです



▲切り出し刀という、刃先が斜めの彫刻刀で、墨線の両側を彫ります。「彫師は、どの角度からでも彫れるように練習しているので、板をなるべく動かさずに手首を回して彫ります」と語る阿部さん

どうして職人の道を選んだのですか?

「私は神奈川県鎌倉市生まれなので、幼いころから鎌倉彫りが身近にあり、木に馴染みがありました。将来は手に職をつけたいと思い、ものづくりが学べる専門学校へ進学しました。その後、荒川区で職人になりたい人を募集していることを知り、木版画の彫師の親方へ弟子入りしました」



▲彫師の仕事の魅力を聞くと「細かい絵を彫ることにやりがいを感じます。今回の取材を通して、木版画をもっと身近に感じてもらえたら」と答えてくれました

ハガキにカエルの絵を摺ってみよう!

いよいよジュニア記者が摺師の仕事体験に挑戦! 今回は4色の絵の具を使って、ハガキにカエルの絵を摺ります。ハガキは、和紙とは違って水分を含んで膨張する心配がないので、初心者にはおすすめ。どんな作品が完成するかな?

▲小川さんからジュニア記者へ「平行に摺ると色がきれいにつきやすい」とアドバイス。手首に負担がかからないよう、摺師が使う作業台は斜めに傾いています



▲まず初めに黒の絵の具を摺ります。カエルの輪郭ができました



▲2色目の茶色を摺ると、お腹のあたりに色がつかます



▲緑の絵の具のにりを混ぜて粘りけを出して摺り、ベタツとした質感を出します



▲最後に薄い緑色を摺ります。薄い色を出すときは、絵の具のにりを混ぜません



▲4色で摺った、繊細でリアルなカエルが完成しました。今にも動き出しそう!

そして...体験

ジュニア記者が木版画摺りに挑戦



▲トッパッターは大井さん。緊張しながらも、一つひとつ丁寧に作業を進めます



▲「初めてとは思えないくらい手際がいい。最後までしっかり摺ってね」と褒められました



▲両手をチョキの状態にしてハガキを挟んで持ち、ずれないように親指を添えて板に置きます。これがなかなか難しい!



▲色をつけるための絵の具は顔料といい、鉱石や植物などの自然素材からできています。最近は人工顔料も使われます

上手にできました



佐倉 凪さん、大井 悠里さん、松永 風央さん、山本 和輝さん

▶「学校で習った版画とは違って、作品の完成までには長い時間と手間がかかっていてすごいなと思いました。色のつけ方も実際にやってみると難しかったし、伝統工芸技術は奥が深いです」(佐倉 凪さん)
▶「1回摺るたびに作品がどんどん出来上がっていくのが楽しくて、やりがいを感じました。今日教えてもらったことを、図工の時間などに役立てられたらいいなと思います」(大井 悠里さん)
▶「パレンなどの道具が自然素材からできているとは知らなかったのが、驚きました。見ているときは自分にもできそうと思ったけど、実際にやってみると難しかった。でも楽しかったです」(松永 風央さん)
▶「工程を覚えるのが大変で、次は何をするんだっけ? と確認しながら作業を進めました。絵の具を刷毛で混ぜるのを忘れたときは焦ったけど、とてもいい経験ができました」(山本 和輝さん)

どうして職人の道を選んだのですか?

「ひいおじいちゃんの代から版画の摺師をしていたので、生まれたときから木版画は身近なものでした。大学卒業後は一般の会社に就職しましたが、一人っ子なので自分が継がなければ伝統が途絶えてしまうし、やっぱり摺師の仕事に継承したいと思い、24歳のときに職人になることを決めました」



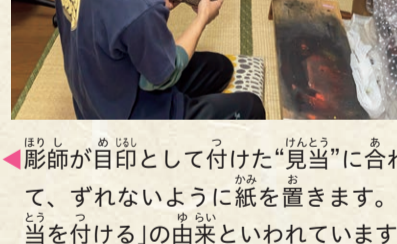
▲「職人はプロスポーツ選手と同じで直接結果が返ってくる」と小川さん。厳しい世界だけど、結果が見えやすいのがやりがいだと話してくれました

小川さんのお仕事を見てみよう!

彫師が彫った版木に色を摺り重ねて、作品を完成させるのが摺師の仕事です。版木の上に絵の具を置き、刷毛で薄く広げたあとに紙を乗せます。その後、パレンで摺って色をつけます。1色ずつ摺るため、7色を使う作品の場合は7回摺る作業を行います。グラデーション(ぼかし)や濃淡の表現にも、摺師の伝統的な技法が使われています。



▲小川さんが摺りのお手本を披露。今回の体験では1種類ですが、普段は作品に合わせて3~4種類のパレンを使い分けます



▲彫師が目印として付けた「見当」に合わせて、ずれないように紙を置きます。「見当を付ける」の由来といわれています

▲小川信人さんはこんな人

▲平成27年4月~令和2年3月まで荒川の匠育成事業に参加。祖父・関岡功夫氏(二代目関岡翁令、荒川区指定無形文化財保持者)の弟子・川嶋秀勝氏(荒川区指定無形文化財保持者)のもとで修業し、現在は親方と同じ工房で活躍中。

作品を見てみよう!



▲主に明治、大正ごろに制作された木版画。江戸時代の木版画に比べ、絵のタッチや色彩に、西洋の要素が採り入れられています



▶江戸時代の流行などを描いた多色摺りの版画。錦絵ともいい、風景画・役者絵など、江戸の人々に広く受け入れられて大流行しました



▶浮世絵



▶手彫り手摺で仕上げられた交換札。江戸時代から始まった愛好家たちによる交換会は、今でも定期的に行われています

令和5年度「はばたけ! 若手職人展」

荒川の匠育成事業の修了者・研修者による伝統工芸品を紹介。阿部さん・小川さんの作品も展示されるので、ぜひ、見に行ってみよう!
●日時: 4月14日(金)~6月7日(水)
●会場: 荒川ふるさと文化館
あらかわ伝統工芸ギャラリー
●観覧料: 無料

Topics

第15回柳田邦男絵本大賞
表彰式が開催されました

1月28日、ゆいの森あらかわゆいの森ホールで「第15回柳田邦男絵本大賞表彰式」が開催されました。これは、子どもや大人が絵本を読んで感じた感想や感動、読み聞かせをした体験などを、ノンフィクション作家・評論家である柳田邦男さんに向けた手紙にして送り、柳田さんが感銘を受けたものを選ぶという形式の賞です。今回は、子どもの部で1,667作品、一般の部で37作品の応募があり、その中から大賞などに選ばれた方々に柳田さんから直接賞状が授与されました。

また、表彰式のほかに、小・中学生による絵本の読み聞かせや、柳田さんによる講演会も行われました。



▲柳田さんから表彰を受ける氷室明希実さん(子どもの部・大賞)

尾久宮前小学校で
味噌づくりを行いました

1月下旬、平和や国際的な連携を実践する「ユネスコスクール」に認定されている尾久宮前小学校で、6年生が「食育」を柱にしたSDGs学習で作った「宮前味噌」が完成しました。

宮前味噌は、昨年6月に子どもたちが仕込みを行い、その後、交流都市である埼玉県秩父市の新井武平商店で熟成が行われた味噌です。

子どもたちは味噌づくりに合わせて、図書館やタブレット端末を使って、味噌の作り方や栄養価などを調べる「調べる学習」も行いました。

長い時間をかけて完成した宮前味噌は、6年生に配付されたほか、給食では全校児童に提供され、「おいしい!」という声が聞かれました。



▲出来上がりを思い描き、仕込みにも熱が入ります
▼自慢の味噌が出来ました!



令和4年度

あらかわお弁当レシピコンテスト

受賞作品発表!

今年も素敵でおいしそうなお弁当がたくさん選ばれました。小・中学生の部で選ばれた各賞のお弁当を紹介します!

小学校1~3年生の部

「わんちゃんイン(in)弁当」



天野 英実さん
ひぐらし小学校・3年生

うどんう会で食べたそばろのお弁当がおいしかったので、自分でも作ってみました。

小学校4~6年生の部

「30品目と健康を気にした
いろどり弁当」



栄養がたくさん入っているこのお弁当で、元気で笑顔な人を増やしたいです。

霜田 帆花さん
第一峡田小学校・5年生

中学生の部

「～祖父母に向けてありがとうを～
高知県産弁当」



福地 美里さん
原中学校・1年生

高知県の祖父母の畑で育てたナスやしそ、かぼちゃを使って作りました。

荒川区長賞

女子栄養大学学長賞

小学生の部

「コロナかでがんばっている人達へ」



宮崎 愛子さん
峡田小学校・6年生

コロナかでがんばっている様々な人へ向けたお弁当です。

中学生の部

「勉強がんばれ!! スタミナ弁当」



上原 歩美さん
南千住第二中学校・1年生

受験生のお兄ちゃんへ、勉強がんばってねという気持ちを込めて作りました。

あらかわ
今昔ものがたり
日 [あらかわの歴史と伝説]

【問合せ】荒川ふるさと文化館
☎(3807)9234



その143 芭蕉さんが詠んだ春の句
～「雛の家」の句と「行く春や」の句～

革の戸も住替はる代ぞ雛の家

「雛の家」の句 これは江戸時代の俳人・松尾芭蕉さんの句だよ。「慣れ親しんだ深川(江東区)の芭蕉庵に、小さい女の子がいる家族が住むと聞いた。きっとお雛様を飾るような華やいだ家になるだろう」という意味だ。芭蕉さんは、奥の細道の旅に出発する前に芭蕉庵を人に譲り、弟子の杉風さんの採茶庵(江東区)に身を寄せて旅の準備をしていた。その時の思いを詠んだ句だよ。

もう一つ芭蕉さんの春の句を紹介しよう!

行く春や鳥啼き魚の目は泪

「行く春や」の句 みんなは、芭蕉さんが元禄2年(1689)の春から156日間の旅をし、『おくのほそ道』という世界で一番有名な俳句の本を書いたことを知っているよね。

芭蕉さんが旅立ったのは3月末の27日。まだ薄暗い早朝にお友だちと船に乗り込んで隅田川を遡った。目指したのは江戸の北の玄関、千住。富士山や上野・谷中の景色に別れを告げ

ながら進むと江戸の境に架かる千住大橋が見えてきた。千住で船を上げれば、いよいよ江戸の町やお友だちともお別れだ。これからの長旅を思うと、二度と戻れないのではという不安や寂しさで胸がいっぱいだったはず。橋の袂まで見送りに来た人たちにその時の気持ちを込めて詠んだのがこの句だよ。「過ぎ行く春を惜しんで、ひとりでなく鳥も鳴いて悲しみ、魚までも涙で目を潤ませている」という句なんだ。

『おくのほそ道』の中で芭蕉さんは「行く春や」の句を「矢立初め」と呼んでいる。俳句の世界では、旅で最初に詠む句を「矢立初め」と言うんだって。だから、南千住は「奥の細道矢立初めの地」と呼ばれているんだ。南千住六丁目の素盞雄神社には、文政3年(1820)に建てられた芭蕉さんの坐像と「行く春や」の句を刻んだ碑(荒川区指定文化財)があるんだよ。

みんなの春の句 春は卒業・進級、出発の季節。芭蕉さんのように五・七・五に春の思いを託した俳句にチャレンジしてみ



▲荒川ふるさと文化館前のペイント画